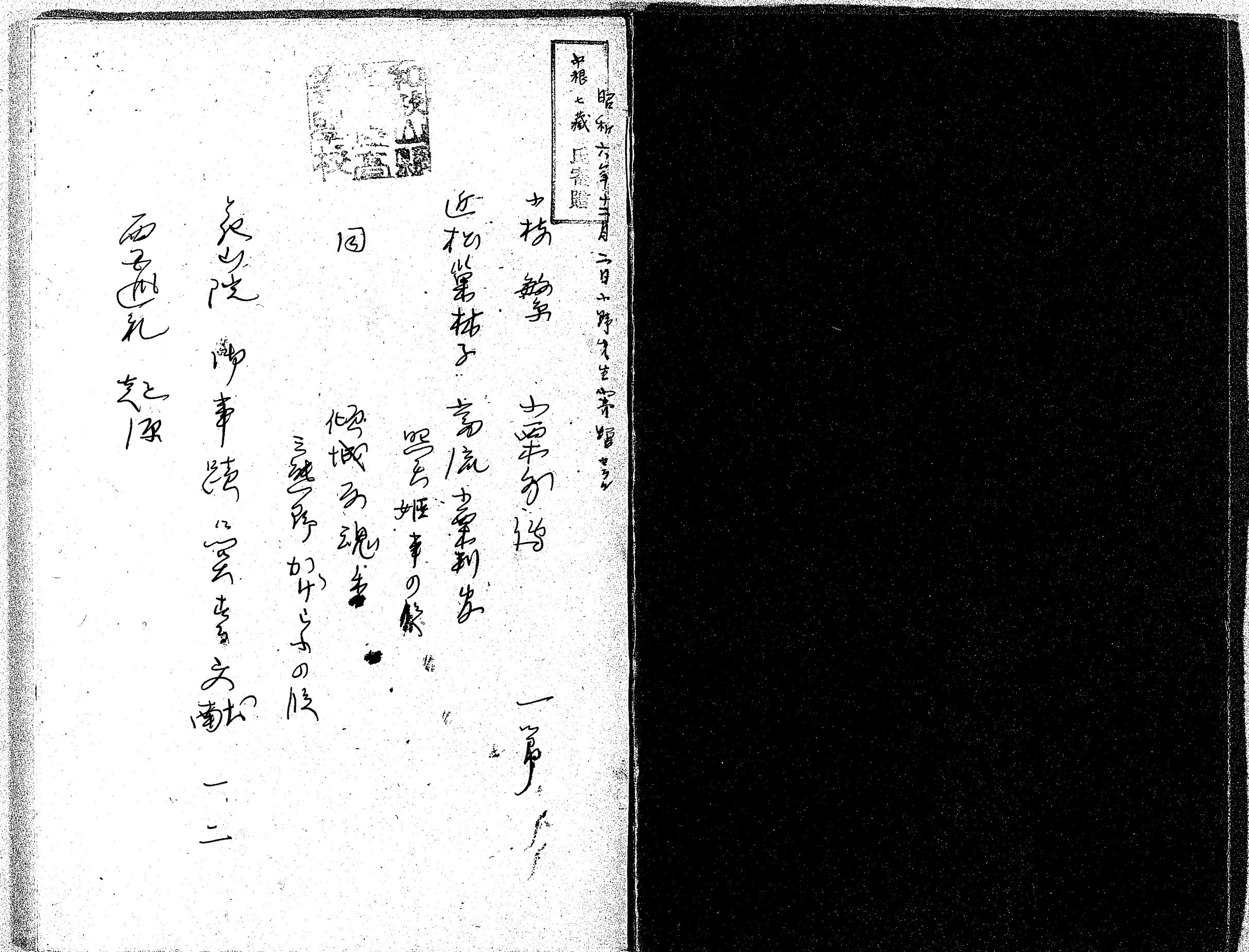


小野翁
寄興
熊野史料



20

8 9 10 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03929 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 3 4 5 6 7 8 9 10



291
3
7

中根
七藏

昭和
十六年十二月二日山野木先生著書
せり

ナホ
新集

山本新

近松
第祐子
高流
新集

写真
姫事の序

化城
阿魂集

三城
阿骨子の序

(3)

久山院
脚本
近松
文庫

一一

西元
七
原

8 9 10 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03929 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 3 4 5 6 7 8 9

雜談まことをあつしの勝が倒たおる事こととまつ
水みずト巣すずねぬ木木根ねの弓ゆの氣き味み
弓ゆの矢やを立てて、鳥とりをかぶる事こととまつ
の元もとの「飛と鳥とり」でござります

寒さむ夜よ話ばなし

小栗外傳

卷之十一

東都 緋ひ山 戯はら編

第十九編

千里に車くるまを辛からく佛助ぶつじゆを祈こころる

一朝に病びやく愈ゆて神かみ徳とくを仰あおぐ

且さ説せ小栗助重おぐりすけしげの當とう阿上人あじゆうじんの教きょうにまつし熊野くまのに行ゆ人とぞつづくが、
東海道とうかいどうには憚おそれることり難むずかいれば、木曾路きそじゆをこそ嘗なまくわと助重すけしげ
をば車くるまに乘のる、照天てんてん娘むすめが容ゆ替かわへ身みは林はやし百ひゃく丈じやう衣きをまとい、
被かぶにし笠かさに面おもてを蔽かざ隠かくし全く乞うけて、いそたちて坐おち行ゆ車くるま、
今いま思おもひつ旅たび、木曾路きそじゆをさして行空ぎくうの心こころ憐れん愍めんな此こ、
過すぎせいいかなる作業さくぎょうにて、幾許いくすの憂う愁しゆを三芳里さんぼうりの里さとを旅たび、道みち木きを、
ふみかふみかくさじさじ松橋まつばしをうち渡わたり、行ゆほどに往むか來らい人ひと助重すけしげを
見みては不審ふしんす、み寄みよ、首くびにかけたり木札きさつを譲まわす遊あそび人ひと
の助すけけ給たまへる餓鬼がきにこそ、さぞ因縁いんえんのありつらひ、いで車くるまを牽くわ
引ひて、功德こうとくも深ふかき、千僧せんそうの旦那だんなにならんと旅人の辛からい牽くわひ

1930年
1月14日
印



京都府立圖書館
蔵書

寒燈

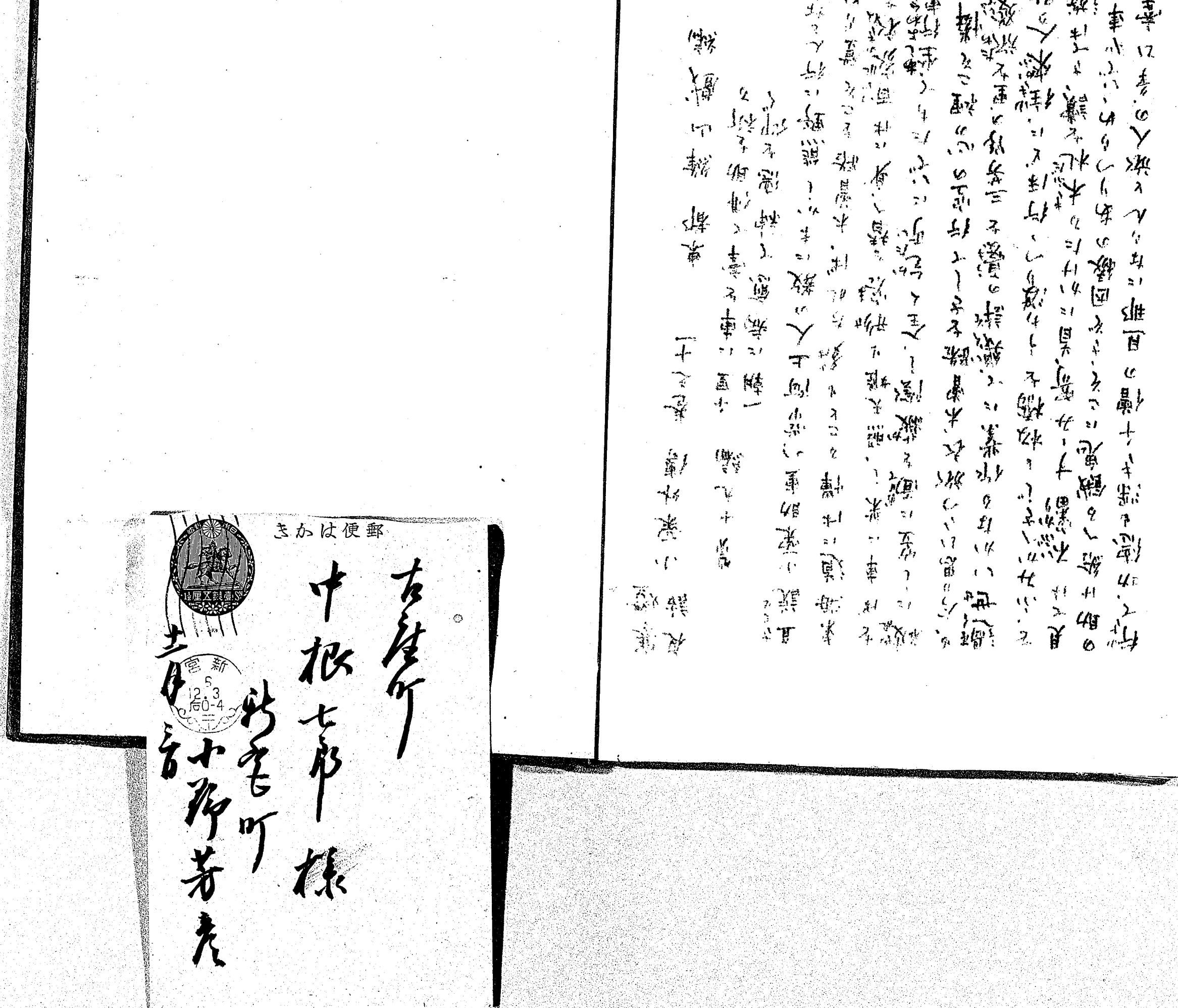
小栗外傳 卷之十一

東都 緋山 戲編

第十九編

千里小車を幸く佛助を祈る
一朝に病愈て神恩を仰ぐ

且説 小栗助重の常阿上人の教にまかし熊野へ行人となつたが、
東海道には憚ることも多有れば、木曾路をこそ當乍れも助重
をば車に乘じ、照天燈の形容を替へ、身は麻衣冠冠をまとい、
足に笠に面を敵隠し、全く乞手にいだちて坐行車中
も、今り思ひうつ旅衣、木曾路をさして行空の心の裡こそ憐なれ
過世いかなる作業にて、鐵許の夢と三芳門の里を旅後道紫
雲ふみかくさじと松橋をすり澄りつゝ行ほどに往来人助重を
見ては不審す。み跡、首にかけたり木札を讀、すば遊行人
の助け給へる餓鬼にこそさぞ因縁のありつらぬいでや車を牽
ひて功德も深き千僧の旦那にならんと旅人の幸い幸ひを



左に一か所、木曾の山道易々と、伊勢美濃路に入りける。
此國の赤坂、聖井、開ヶ原は、萬長が家に近けり。是故り
人方見けに心躊躇ひはす。三惠寺邊に止りて其邊
驛をうかがひけり。然るに此國あたりには遊行支巡り
一人の餓鬼を介け給はんと、坐行車に打た業へて熊野の温泉
に遣らんと、此驛路を過る也。しに此車を牽くのは、
牽ば千僧を供養すに均すと、書付たまは偽なし。
是と牽がることとはあると、人々多い侍ほどに萬長が許
の娼婦等は、街の噂をうち聞て、我們の罪障はいかに
すらと自からねど、彼餓鬼病の小事を牽がば少しき
功德なりや。すらんと語りて、主の長は暫時の暇を乞ひ
て行連たち、三恵寺邊に出迎ふと、ある木陰に餓鬼病の
車を休め居るを見つ。我こそ牽めと寄來り、理なく車を
牽れば、姫は驚き感へども、止まるに猶なくて、心にありて車

に添ひ行ば程なく青墓の驛に至り、今はちや萬長に見
咎められ身の大事にや辱れんと、只鶴圓通大菩薩の御名
を唱へて恙なく此鬼を過さし紓はれど、心す祈念なしつらが
佛の冥助や力はりせん。此當時京都より鎌倉殿の御使
長が許に宿り給へば、俄の事にて忙せき、車を牽來し、
是が爲に別れを告げ、車長が許に還りしが、照天は虎口を
免れず早々に此處を脱れんといそづは汗の聖井へ、走りて心の
闇ケ原、越えつゝ行くや我夫の、病はいつか聖井と、少くは晴れ
祥あらじや、やがて平愈あるなりば、敵の首を馬鹿本、勇々と美名
高官のかみにかどりの我聖井、立つて見て行かん。鏡山の
月影は湖水に映り、墨あき父や實の忠臣の信を石に少しあげ、詮若
助重の枯木に似たる身の病、愈さし紓ひ花咲けの春に逢て絆ね
と伏せみて跡にほし、行はば、京都とほや向きて。日は長竹の伏見の里

旅行人の足すへは渡り堤やいとがま、秋の夜明けで夕日影さしも
名高き駿波津のいかばかりの橋越えて四天王寺を出立つ。事
は車かる、小車のキシリナ岸の松原、八十曲かけて曹山大
師の小舟の棹を断ち、かどひに同身の上の、すらべたれぬ旅枕
左瓢の心のあひを思ひわらひ信田なる森の楠十株にわき
物思少すり古の人の教ことあがむあき。豪世をうりみ萬の黒
はるく此而へ紀の國や、和歌の浦波うち寄せて芦洲鷺
夫婦づれこなだる所に似づれども、わが夫鳥は身の病、こゝに
あります疾こそ、潮干に見立木の石の乾く傳十へたが旅の日數を
経ればやうく坐行車牽きつゝ熊野の麓に着にける。
柳熊野権現と中奉るハ仁辨謙作辨母の尊にて神武帝の御時
より此地に垂跡ましくて今に不朽の靈なり。爾ろに本朝諸神
の中には唯一、兩部の二つあり。唯一と云へるは、辟吉は伊勢皇大神
經を忌み僧尼を禁じ、寧て佛法を用ひざること唯一不二の社にた
。

又兩部といへるは本地の佛を設け做して常に法施を奉げ
僧尼奉仕傳せり。此は麻戸皇子佛法弘通し故に之を
我國の人佛を常わ奉らむと神、いへども國の習俗人の手而
を受給へば和光同慶ましくて垂跡の佛院とはす終ひぬ此事
多くは弘法傳教の兩大師建立し給ふ所なるべし。此御神りの頃
よりか兩部の社となり、本宮誠讐殿をもて佛院と定め新宮兩
所權現の本地を藥師、觀音と為し、至外の末社は至るまで夫々
の本地あり、こゝに闇らさるば是を載せず。且説も照天姫は熊野
に着にけりと女ノ身をしてはり、東の果より南海の熊野を來
るだに容易からぬ旅なり、病る夫を優恤つ、車を牽すと來ゆる
ハ不思議にも怪しけル。是正しく熊野權現の擁護と觀世音の
眞助にて、旅客照天の勞へ代り車を介け牽牛ばす。爾はあり
しと、わが身主なれば其難苦辭言がま方なく身心とて勞れ

しほどに嶺岨なる湯の峰おんば。此車を以て峠道とうどうとなし。かくかうらんと心を惱し徒たに山上を望みて不^いみたり。此當時ごろ湯峰に登山するかとおぼしき僧そう立大人だいじんうち連つれては、こゝに來に掛かたる木札もくじを讀よ。うち敬けいひと照天てんてんに對たい。此餓鬼病がきびやうは藤澤とうざわ常阿上人じょうあじゆんに因縁いんえんありとおぼえたり。いつく如何いかなる人ひとや世よに類たぐ草くさ、病びやくなど云いふを少すくなくに照天姫てんてんひと方見かみく裏うらにて伏ふく沈しづみて嘆なげきしが、やがら渓せきをおりよのやよゆ傍そば是これは東國とうくに方ほうのものにて奴家わらは夫つまもてはよ也よ。不圓ふえん此惡あく病びやくを棄きり斯この乃のしき教くわうに挂かりぬ。常阿上人じょうあじゆんの御縁ご縁は、此處こを嘆なげき申あつせしに上人じゆじん憐れんみて、此ハ然属ぜんぞく本巣ほんそうの温泉おんせんに湯治ゆうじせば平愈へいゆする事ことあるべしと示しし給たまへば嬉うれしくては。此處こへ伴ともりて参まいり侍まつせがん山がんさんの嶺岨おちゆを上あるるべき体からなけれど如何いかせんと思おもひ懸けんす。是これ嶺岨の拂山ふしやまと草くさ物もの傍達わざわざのこの地じ方ほうへ見みえさせ候まわすを幸さい草くさ。是これ嶺岨の拂山ふしやまと草くさ

さややき道みちありや數さかせぬいねとうち嘆なげきつゝ之のに此衆僧しゆそう憐れんみて供たまして清きよれの袖そでを露あらわせり。暫時ときありて其の中の老僧ろうそう進すすみ出だ、衆僧しゆそうを顧かのみて云い。此女性夫めいせいふの為ために身みをもて、遙とほけき旅たびを恙いたずらなし此の来きる難難なんなんはいかに憐れんみ侍まつすや其健氣けんぎする事ことと且また遊行ゆぎやう上人じゆじんの此車くるまを牽くいましハ至いた功德ごくつ千僧せんそうを供養くようする事ことと苦くる愁う愁うう小木札こもくじあり、いや人々此車くるまと湯峯おんばにひきのほし統とうえ走はしやどふに衆僧しゆそう肯うなづいて、いかに女性めいせい清志氣せいしきのいたましく且また遊行ゆぎやう上人の書寫しょり統とうえ事ことと或もは綱つなを牽くいもあり、あるいは車くるまをすしありて苦くる愁うう山さんに登のりけり。その時老僧ろうそう一いつりけるは、是これは道みち嶺岨おちゆならば車くるまとやるは物ものなん、先まむなたける御寺ごじは詔ので統とうへ、彼鬼かれは草玉山くさたまやま老寺ろうじと号いすが、湯の泡沫おとせをもて造つくりし、草くさの葉はしたる草師くさし佛ぶつす。告おす此拂山ふしやま湯浴ゆゆを者もの草光寺くさみつじをもつて於お掛かして、是これ後あと湯元ゆもともんは女性めいせいと爾それを被おへて、僧そう叢そうは去はけり。照天姫てんてんひは喜うれいて此數さう

まひし。草を牽いて東光寺に詣て薬師如來を伏拜。夫の病
速に平愈ありんことを喜び、身を以て湯峰へと卧せし。が助童
長連の燐力也。いと燐子也。さするに、姫は驚き、御邊なる山洞
の下に草を喰、暫時いたずつて、うち、や、おこたりて見えけるに
妙めの心事。^{あらわ}一か至身の勞れ我にありて、草を教誨に因るを
枕のもとへ自縛の危難歩みす。檢に善哉、^{よし}照天極汝を身を
もちて、から大儀に處しとせて、山川淮海を越へり、夫の為に苦身
走る類、燒ける真筋を赤くも横化の所が赤と心むへと感應
あつて、助てか痛苦を救ひ得させん者哉として神慮と覺えし檢ゆ之
地直^{まことに}是志孝の志記寫されば、是極善の餘益にて沈痼
頓に快然せんとく治堂に來らべし、時刻を移さば障碍す。あくん
前刻、僧衆助童が車を助け牽ひしも是機現の方便ぞと宣ふ
考の分耳慈に従事くは、奉の松園に豪傑の名を譽り、醸しあすし
翁の姿は見えど夫の側に倒坐たり。照天は睡醒りて、神勅の程

の有がたく信心幢の鎧じつ、感喜の渦に被を浴し此上は何を、疑ひ
何を懼ひ、いまと云つ、小車の綱を片手に甲斐とおき女郎がりも
念力の強きはなかく、丈夫^{まじ}及ばぬ嚴^{ごん}や松^{まつ}根^ね獻^{ささ}て車を牽
ければ、苦なく半年に攀攀得たり。此地方は則^{まことに}是温泉の源^{みな}金佛
の薦^{すす}仰^あ。その像^お十二の穴あり、空穴より温泉湧出で
諸病を治す。万に一^い差^いなし。是佛秋方^{あき}僕^くの立妙^{たて}事。照天は
夫をかゝ抱き、薬師の名號す。出湯水を灌ぎ、かくれば不思議也。然
周身爛ルし、外瘡となり、膿汁流出で臭氣甚^{しき}かりし。是瘡悉
く癒^いき結びて臭氣失^{つけ}は、姫靈験の歎^{たん}なる。感^{かん}機現の神恩
と心^{こころ}相^{あわせ}て、奉らせ、尚神力擁護を加へ給へと祈念して急慢なく
日^ひ三回づゝ浴^{あつ}さ走^{はし}て、神明佛院の立^た特^{とく}室^{しつ}からず、終りゆ^ゆ絶^ぜるに
病^病津々^{とんとん}と愈^ゆえて、十日満たずして、さしと醜^うかし瘡^う愈^ゆて骨肉青^あ
瘡^う瘡^うし、草の少栗助童の壯^{たけ}なる身^みとす。けろは不思議^{不可思議}とも[。]解^{わか}め[。]

熊野權現の神力と且は常阿上人の道徳による事と夫婦諸共
に熊野三山へ頌礼しまた照天の宇を參せ觀世音を拝し奉り
為てまことに國の方を伏拜み常阿上人の恩を謝し極至法則童
照天もろい我身佛祖の助にまつて斯く平允愈を極すと云ふ
ど佛子が信の今保て山を越え川を涉つていと遠事武藏
にて通じて紀伊國なり果て是れより到着したと得たり此恩が
セムアシと懇心禮を表す慶礼と云ふてこそこれは因縁いかげぬ
はゆべ夫の為として夫と天と仕ること少ぬことをかし
マハ夫の為としてありま身を肉體にせずともいゝてか歎い事多き
長途の旅を経る所いと佛經玉法の三寶と般若供養す幸甚
善なきことを得たれいかで奴家が力は及ばんやとおのが裏をか
じて口を塞ひ誇うを譲りいとぞやかに少えける。助聖妻の賢き
は今に始めぬことばかり、千辛万苦を煩ひせ終志氣を絶するに憐はし
優れ感謝の誠に因ひけり。夫婦の間禮あるほゞいせき好處す。

斯くて小栗助重病全く愈しかば今は早一日はやく宿志をよし今と
をかれりと東近江居る郎徳等、且は山中郎が尋問しなれば、故に中
一夫婦のみ行ふこと因に慮なくつゝおきわざなれば、今暫く人々の熱誠
を待んとて熊野山の甚鹿にかたばかりの家を構えみ夫婦二札に在りね。
そのうち日毎權現に参籠と神明の加護を祈りせり。

大 小栗外傳 著者峰山小枝繁宗は江戸の人 跡木七郎火の草堂と水八
御主殿村の役を勤め西谷忍水構りた住む數軒ト草堂長文才あり
勤務の傍方戲作と樂み 日本外傳、鶴井義、佐野忠義、玉井源穂
山中外傳 (上編 文政十年(1827)下編 文化十二年(1815))
東坡録 (二十三回堂林树奇傳柳の織) 文政六年(1823)六十八歳で没す
玉廻の路、西屋敷の慈濟寺等の著述文政九年(1826)の崩御あり(吉野花草集
人曰) 普度後、鎌倉大草紙、常陸國誌、鎌倉後第九代記、小栗繁宗
南朝言ひすに記載、あら記すと云ふ(西園)といふ(北園)といふ
かを知らず小栗外傳は右の著者又藤澤驛遊行寺院中長生院の
小栗豊縁起 并に元禄廿年(1708)三月十四日付本座にて興行せし近松葉林

四十六歳の後、當流山栗判官等を參照して構成せらるべし。
遊行寺内長生院。最初に櫻井は小栗満吉湯華温泉の宿題にて難病
平倉義節へ訴へ本師安堵を得て國守から栗城に赴く。塙山大権と相
洲にて刑を平和多幸の空福を受ける。應永三十一年（一四九四）三月十六日、車去
法名を宣嚴院滿阿彌と號し余年助を額を懸け照姫は承享七年（一四九五）
十月十四日往生す。長生院壽佛房に號す。

○時年六月祖一遍上人（松惠光十五歲にて同）天台宗繼室す。最教律師の徒弟と尊臘稱切り
是を後津土門（聖達上人）の徒弟名を改め後年又は天皇の建
治元年（一四九一）熊野權現の示現より名を一遍上人改め諸州を廻
ゆ。承和元年（一四九二）正月二十九日攝州兵庫津於て
小栗判官滿重（又は助重又は栗氏）を救はれたる遊行上人金剛十二
代傳・信上人（あはざれしきの如し傳・信上人は南朝後龜山天皇第四
の皇子なる信親王（第一）御年十二にて遊行八代傳・船上人（清）
時第十二代・信親王（第二）御年十三代太空中上人（なりしより如き小栗の胸
掛けし札の文言は「此病人送於熊野本宮湯若有人暫助引之
者可勝於供養千僧功德矣」とありしと

○

當流山栗判官

元祐十一年三月十四日より竹か座

近松葉林子甲子歲の作

第三段の内 照矣蛭車の段

元祐十一年三月十四日より竹か座

興行

わすれ草かな、種あうば、我恋草にうなませぐ、うきが折々心ルねん。
かたわ車の綱チヒル、のづなをづなはあらゆりと、ア、いかほは我どり、
世にはかりて先だてし夫の苦楚を祈りにぞ、心は物に在はねど、安
ばかり体も物ぐるしいかたみの鳥帽子眉深く、初音の里の我さゝに、
露のうらかふきり掛て、引せやこの車、いくや佛の傳手の未妙なる
法にあふげかの長の門前はや過ぎぬ。外總の庵の夕とづく、無井の
シリくはこれとかや、片われ丹の片われは落ちて水の底にありあるが、
見えておきものは彼の見し人の面影を夢に来るやと松葉山天津に安
遊る輪廻ははぢりとばかりはよじ切ひじ、すみれまづの淡井が
景、旅衣（木しづき）、板屋が軒に風あひて、其のもすそも不破、不破の
廻、數多の關、數多の綱、夢々えいさうえいと引く車、弓頭を取て
引かせらる、引けや平湯の群千島、もろこゑかけて難さぬや、おいかげ

中綱、しめて見よしわて寝て裡のまつごと、耳にとひま、懷と、美濃
と近江りさかひなる、宿物語や麻の山、松の森とあはれげに二人なりふる
夜半とかな。アレ、一役ばく、お出でよ、お出でよ、お出でよ、お出でよ、
水深く沈みを物を思へとせ、沈まば沈め、とんと沈まん意の測、まぶちなほ
をはら、と機あるうさり、とさつと左の振袖を、ア、また、
の袖下へ吹きぬく風は寒風か、玉乃はだへに一み、と、其いつぞや
の下絆の、今は昔に解せよかし、解くや柳のまゆわかばはなし、紐解け
られど、誰かは哉を志たびつとうすす流れん言の葉のうたづめ川を打瀬れ
傷故つくる畢竟の鏡の道を引過て、梢に郷より仇浪の琴子のうらべか
かり櫓の音が松風の音すでないよ、ア、車がの、通りめぐる瀬田
の橋、引いつ引きさて一二た夜、御代をすねし芭竹の大津上湯で廻寺
や、玉座がかどに車着く。あはれ此身が儘ならば熊野の御山
ひきつけて本宮の湯を引くがに、三毛使ふ身は力者す、力車の善根
と是までなりと名草の木の勢勢さし筆筆にしてそと數ならぬ美濃の

萬長者か水仕みず不女常陸ひたち小秋こあきといふ女、上下五日ごじの車の旦那、
こころさむは恩人おんじん頤生喜提いじゆきだいと書記し、別れて帰かる道みち芝の
岩いわはしが縦たてといふやう、他生ほかじゆのえにしこそ、この文世ぶんせいの櫻さくら御ご子こ、
立たつ筋すじりそはいざさうは、さうば、と袖紋そでもんを染そめし、
遠山とおやまの雨あめ務むほのか、木隱きひれて涙なみだに聲こゑも、うはが此こし。

第五段 一大回 圖

萬の流此いはく是瓦いは、生薦いのすてふ熊野くまのの湯運うつ、他力たぢ引ひ來く
駕かわ神心じんじすこやかに小栗こいりの判はん及およと名聲めいせい紛まぎはうすけら、
青あおききは物ものかかな、土牛どうす、薦いのすて今又人界ひとよのへ立たつ席せきを坐すわせり、
そ有あり能めい、則そなへ上流じょうりゅう朝移あさながり、車くるまを安堵あんとせて金かなの丸まるをから、美濃巣みののす
を基もとの萬長者まんじょうしゃに車陣くるまぢんをめざし、常陸ひたち小秋こあきと水仕みずの花はなをか
あらゆる、萬長者まんじょうしゃは用もちをとしたりけり、吉野花よしのはなの華衣はなはなにうづく照天てうてんの煙えん
主ぬしの仰あおの望のぞけぬが、うはは舞まいをうめびく前垂まへたれ櫻さくら船ふねをもて、情模じょうも様ようの色
山袖さんしゆ、且まことに成なく、葉は死しも再なび蘇よりし、小栗こいりの判はん及およと名聲めいせい、さては夫おとこ、

ましませぬか。なほ我ニシテは解大の體、やあ誠かほんに現かと人目と
分も抱中つむ鑿し底のこもれをもす。三世の縁とは是ぢうん
涉物説、彼と共に長はし數の形寝美あり、先駆開闢の上人に
いひや謝禮を遣せんと

御寺として生れる、

○ 仙城 又魂翁

近松畢竟翁五十三歳の時の作

寶永二年八月十五日 開行

主　　司　　將軍元信（　傳て武隱の物を皆空はぬ勧め難いと云ふ
喜鳴の事多し爲り　立候先様、既て又事（太極先様）萬方を以て御所御事
之候は爲りの事、元信（元信）と申す者也。元信は、前田利家也。利家は、元信の名を有る（三國の勝山、關西の勝山、常陸の勝山）
元信は、元信の名を有する者也。元信の徳也。元信の才也。元信の能く也。元信の秀く也。元信の雄く也。元信の俊く也。
元信は、元信の名を有する者也。元信の徳也。元信の才也。元信の能く也。元信の秀く也。元信の雄く也。元信の俊く也。

三 然御のかげらふ姿 の段

え信恩人名古屋山三の言葉のすゝめ六角家の姫君と相嘗宴
こと、扇を以て衣嚢入の行列在近の馬場へさへか此時は白羅切着ある
一横合子奉仕使で、某は主佐元信の娘。元信とは歎く契りと申なり
姫君と之の御内侍に相嘗宴にて、姫君の衣裳を、また
扇持てて表見たる御内侍に、元信の許に後出でて五日目に馬糞舞踏
令主元信方へ來り、侍女等十七日前元信と夫婦連坐
て發刑の事に參りたしていひて、むかひて、むかひて、元信が
人々驚かされたりさて不思議異心夫婦、まことに左も右も口が開
きを能へば元信は一心不乱に御内侍、御内侍と、或つて下さる
事未だ歸らんおり下では悲しき事多きなり魂魄假に身を見せず
かとみゆくみやが御下され心懃に神を泣かし三死際かけらる
身勝ちと嫁く物出るすと、仙城又魂翁の眼目これ
おまか

あら様やあたう秋や夫婦の原かはく花も一痕の其のなかわとは
からぬ男のいたはしや（中略）
月は缺けり三つの山安寧のたまは片便宣教と云がす
言傳といはて心の熊野路や照天の姫の川件常陸小郡
夫政身を旅籠金の水桶のはしために女のかよあみをつま
とはうちに白糸の縁はまたちゆづり車心は物に狂はねど妻車
物に狂はせていせやひづく此車えいさう（中略）
元出の旅路の後世の友一ひきひりば十傳供養二ひきひづく
萬能の薬湯もとと多くからに四百四病は消えせん、骨髓す
れなほぬは私がそよまと戀やまひ、變り心を棄しては神の
御名ナヘぞつとする、飛やしろ瀧、元王子（木九十九所
高に成つてし思せせ世は私御の浦）ござゑがる葛代や岩代
崎潮見坂かきうつす繪は瘦少し我は殘山妙身とゆけば

いとしやせこそわがつまの浜に人れて葦掩松の栗は袖にみつ一弓の
新嘗の笠唐かうと出島によす白螺の浪、岸うつ波は善也若や
那智は千手觀世音、いにて花山の法皇のきさきの別院を
戀い慕ひ、十善の御身をすて高禪・西園、懶やへ三度後生
前世の篇頃かけて發心門に入り人は、神やうぐりん御在社のじう
じやう殿の笛をありて下り待うけ悦び絵やとかや、我はいかある
罪業のその御邊の十二社をめぐる輪廻を離れれば疑深き奈無川
流のつみをかけて見る。ごうの秤のおりに体それへ輕き般若の
岩田川を着むる。無跡・相光の方便にや、名所名所裏立まであら
はれ動き見えければ元信信心軒に漆み我書一人筆とし思はれど大
國をうさぎ南無日本第一大靈験三所權現と伏し柱みかうべの御
て目を閉ければ南無三寶先に立たる我妻はまつかさまに天と踏み
面歩を運んで歩く行はと驚きこれぞ不滅未來の幸や故、誠や
人の物語死したる人の無野・詣大或は逆様後向、生きたる人
に誠や

立候付て宵ナリ心ハ不、りこと有りしが、ナキは利女体
死んだかとこほし初めハモ、済より盡きぬ歎とす。けり。取かしや
心は陸地を歩むと思へど、ナカサ未に是元けるかや、四十九日か其中は
坐姿の様は絶ほれ姿を見せて笑りし方と妹翁の中には、け立ち姿想
はかり身を絞る済の靈房や、織幕の霞、見ゆるのリ是限りと立
見之つ應此つとも大の油煙にまざれ失へけり。元信五輪とかは
と枝、ナシ雨露に枯葉、勝骨をとせむ、寫の、肌身に添へん夫婦
の支、何に此氣の存るヤ、現世の蓬萊かなはす。ば少く死して此世
を去り極樂諸天はあらかのこと、たゞ地獄の底までり、ナシ伴ひ
廻れ立てと座敷の腰々、屏風か一のケ、障子を開き、ナル遠山休何方
にぞ、みやはいづくに我妻人明る遣野に遣手の形、現はれ是之し
ぞ者ほれ矣も。(出山、勝山、香山の聲を擧げて御所の桂園、四大圓堂の事
ちやく惜哉了(本傳)情すら、(本傳)縁少しひゆく道ならば、(本傳)人
とは思へども夫の命長か此と祈る心も様々に皆毎執のあだ夢とさめくもろき
續の跡の、(本傳)の床の水、連理の蓮、片して、(本傳)聖を待つぞ、待さん
おもしじは、(本傳)一間半修造、永離三惡道、南無や三德門の本尊の三尊
迎へ候へや、道すき絶へと唱うる事)は伏屋に残つて形は見えず當えはけり。

賴襄 日本政記卷之七

華山天皇(冷泉天皇大御懐也)

諱師貞、冷泉長子、母贈皇太后藤原氏攝政伊平太在位
三年、改元一白寛和、遜位後二十二年崩壽四十一葬孤屋

川上法音寺北。

冬十月、天皇即位于大極殿。(時年十七、太政大臣賴忠、關白廢政、左大臣雅信、

太子傳、右大臣兼家、左大將朝光、右大將濟時並如故。權中納言藤原
義懷、左中辨藤原惟成、參決機務。義懷任皇子、機敏(謂朝章
難以資妙)王尚達(未詳)同然以外官員政親仕惟成右少辨雅材方
正有幹略、與義懷協心贊畫文章博士兼彈正少弼大江匡衡(烏侍讀)
帝勸精圖治、紀綱稍振、威屏息先寔太宰府多下私帶共仗者、聞
上即位皆解散。詔求直言曰朕在東闕十餘年、即位則淺粗聞前
微圖後治。頃水旱頻降、民困土木、學辰日多、少孰節儉、食廩已竭、
田園自荒。夫國之將興、上下聚居、其將廢、道路以目。雖澆季之俗、
疲極之民、忘身戮力、庶可扶濟。人知而天和、民足而君足。所謂大

臣重緑不諱小臣畏罪不言下情不上通此惠之大者宜令公卿以下
外外百官五位以上及秀才明經及第者各上封事臣朕不遠御等
自慮中心廣詢衆庶莫遺微惑凡國之利害政之得失盡露
其膽莫得譁隱○寔和元年乙酉秋七月女御禰子卒大納言
藤原鳥光女也○二年丙戌夏六月右大臣兼家使英子首兼

削髮從之初上性輕佻數易所幸獨禰子不渝有身而出完
就其家上不忍離強召同寢終不分娩卒上哀毀過常兼為
藏人左少辨雄桀多智兼家授之許諾是月庚申夜道急得間使人
上許諾約期義懷惟成知之數諫懇請上聽位歸佛同臣亦奉從
先奉劍璽於東宮已興佛嚴久替奉上出宮上猶嫌道急促之入
寺歎明藻飾道兼持刹佯請還家訣父母乃去不復來天文博士安部晴明
察乾象有變急入朝奏之不及義懷與惟成聞之馳至寺相視失聲
愧輔翼無狀遂雄桀為僧持戒終身法皇歷游當苦至病卧
海濱殆不起後入京居外祖母家稍近婦不

○ 樂府物語「様々の花」卷八

かの花山院はこの冬山にて御坐戒せたまひてその後熊野にまわり世
統ひてまた帰らを繕はざ。いかでから御車おとあなはせ給ひけん
とあたま一ノあはれにかたじけなかうから御すべせと見えたり云々

○ 同上 「見はてぬ夢」の巻八

花山院所あくがれありかせ給ひて熊野の道を御心も惱つゝ思ひ

けるにあまの志ほやくを御覽見じ

たびの空よほの煙とのぼりなばあまのもほ火をかくや見ん
とのたまはせける旅のほどにかやうの事多くいふ集め給へるどかばか
人し御供になかうければ皆高ルにナリ。

さて勢つき逃らせ給ひて圓城寺となり所へおしまして櫻のいす
じうおもしろキを見ゆべりせ給ひといどいごたせ給ひける。

木の木とをすみかとす此はおのづから花見か人とすりぬべきかな
とぞ来る御ありヤマリいみいうかたじけなくなん。

「旅の室の御歌」 大鏡文

熊野の道に千里の漫と小所にて御心地をこなはせ給へれば、漫づらるる
あるを御枕にてあはとのごちりたるにいと近くあまの鹽焼く煙の立
のぼる心ほそさがにいかにあはれにわほされけれむ。とす載せたり
『木のひととの御歌』の意
われは心あき世すて人にて春秋もと見る身ながら花ざかりのほど
木のひととおぞらい所とてそれは自然に浮遊の人妙くに花見る人とす
あることよとす

○紀伊横風土記 幸喜郡第十一 那智山

○花山法皇御參籠基趾
那智山社の西北二千五百坪にあり古き芭蕉 花壇等有 花山法皇御所持
の忠い云傳小 花山法皇の御歌
樂遊物語 木の下と走升かとしはかのつかり花みどりとすね(音)す
金の櫻の柱木一互めり 法皇御參籠の時の木とひり芭籠とし石櫃は
南龍公の御斎附拂り 御船も芭籠舟の寺跡を今は圓成寺とも
統々義集 那智へて庵の柱に書はける
前大僧正行舟

那智の山に 花山院 御庵室の有けり 木に櫻の木の
侍をみてすみかと すはとすすせ統けんこと おもい出
うして よみける

西行法師

御參籠の御遠跋をたぬ春草(木)の 南龍公す(寄)せられし石櫃
の木(木)はす(木)の木(木)とえや(木)の木(木)とえや(木)
の木(木)はす(木)の木(木)とえや(木)の木(木)とえや(木)

名體 長二尺、幅一尺三寸、高一尺、花萼三寸、附葉深十
八寸

彫刻の文字 正面 花山院 御庵室 二
花萼 一

裏面

作者 小曾禰喜久助

同蓋 長二尺三寸 中一尺四寸 在享和五年 庚戌

蓋、裏形刻

西國巡礼

正月

御茶碗、今神社に在り。外藤湖南先生の附讐として、御茶碗
せし時 行基焼、下焼方のあすと云ふ。

○西國巡礼

西國三十三所圖寫にて
真應集末に云々

巡禮の禮與は德道上より攝州本山寺を第一番と云ふ後

中絶せざる花山島皇と河内石川寺の眼上人。青嶺山の竹空上人と辨光僧正と共に

絶たるを縋ぎ巡礼し終む其時那智と第一番とし故に云々山には徳道と巡禮の

草創と。花山島皇潔色し終む故に清白皇と中興開山とするか

吉田東伍博士のより地名辭書。那智山の傳

修禮歌。浦ノ先や岸うつ波は三然原の那智の御山に響く。瀧津敷

摩ニ補陀洛とは觀音の淨土なり。華嚴經曰於此南方有山名補陀洛。御有

菩薩名觀自在。云々此補陀洛山の岸へうちお走る波の音は極妙不思議と

聞こえて聽者よ。諸の苦を滅せ。その岸うつ波は五世朝の那智の瀧の水の

音と同いく妙音微妙の絶頂耳とのんびり畢竟は那智の御山は本朝の補陀

洛山般若の淨土なりと云ふ義なるべし

頃禮歌（御詠歌）昌黎公集事業集に

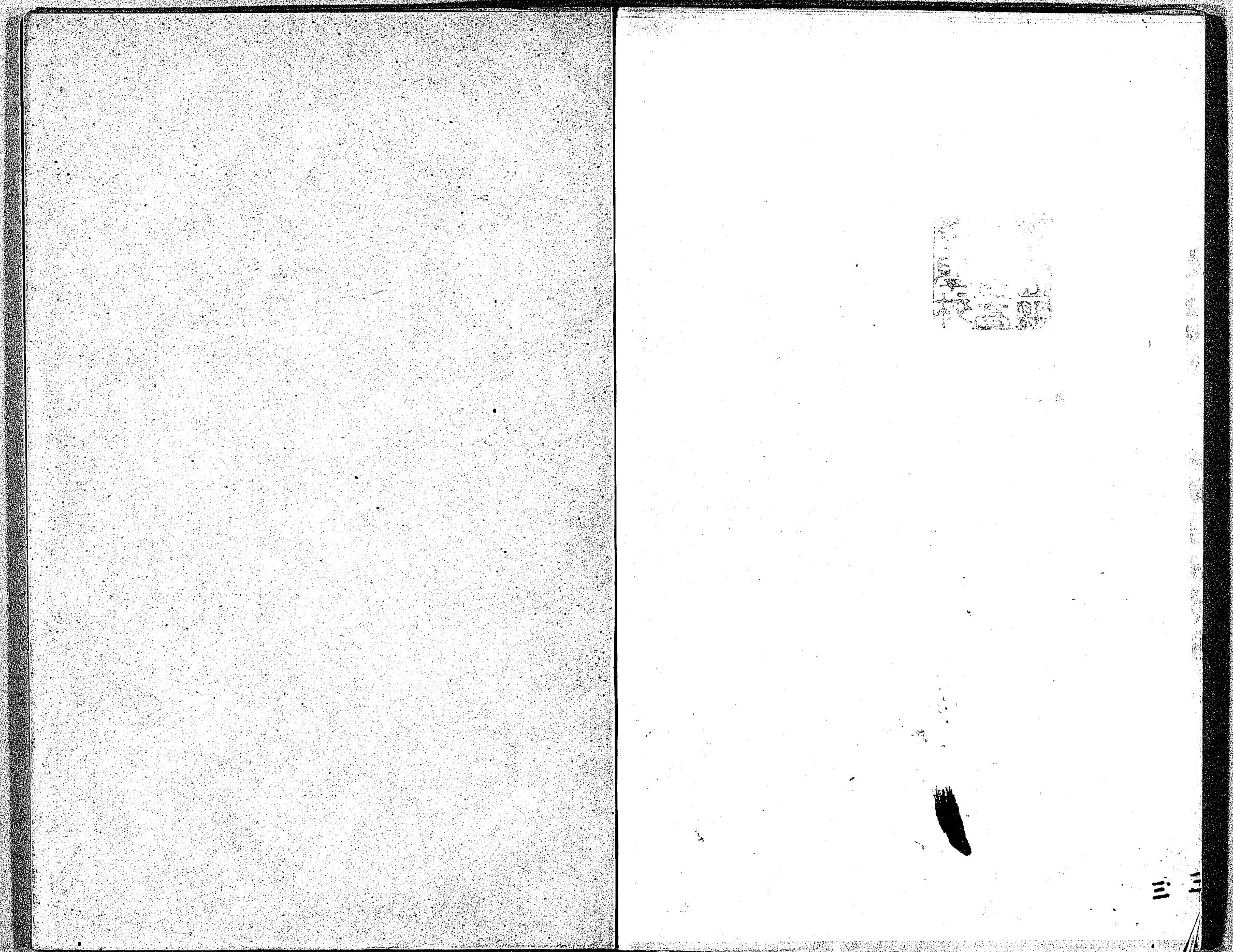
懷子（七）此歌の題すあうとしらすとの内「しあがねの秋」は新古今雜記著

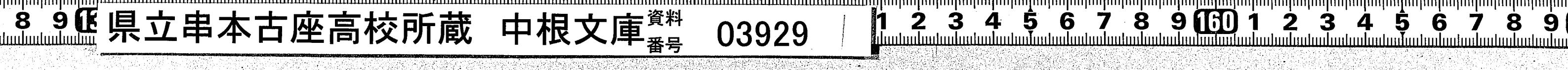
の御歌と出づ嵯峨の歌は「嵯峨の山再びがけのうづりきてさかの、西躰へ有明の月」

奏でて歌蓮の歌寫と云はふがなるはすすみと見ゆ。云々

云々

8 9 10 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03929 / 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9





8 9 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料
番号

03929

1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

8 9 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03929 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

